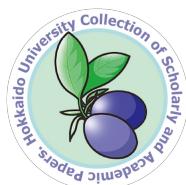




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ディートリヒ叙事詩の語り出し：『ディートリヒの敗走』の構造考察のために
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 69, 99-116
Issue Date	2016-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61065
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_Terada.pdf



ディートリヒ叙事詩の語り出し

——『ディートリヒの敗走』の構造考察のために——

寺 田 龍 男

1. はじめに

ドイツ語圏にかぎらず、中世の物語はしばしば王や王家の紹介で始まる。英雄叙事詩の先駆けとなった『ニーベルンゲンの歌』でも、クリームヒルトをはじめとしてまずブルグントの王族が紹介され¹、ジーフリトの一族がこれに続く。しかしディートリヒ・フォン・ベルンを主人公とする『ディートリヒの敗走』(Dietrichs Flucht: 全体で10129行)の冒頭で描かれた、その祖先ディートヴァルト・ズイクヘア・オットニート・ヴォルフディートリヒ・フークディートリヒ・アメルンク・ディートマールの「系譜」は2500行以上を占める。これは作者とその周囲の人々の強い個性ないしは意思の表われであろう。だがそのように想定してもただちに次の疑問が生じる。この長い系譜は何のために書かれたのだろうか。この部分は既存の年代記のような、実在した支配者の列伝ではない²。筆者は現在、特定の人物がディートリヒを共同体の英雄と見なして、その系譜を書かせたと考えている。

しかしこの問題に取り組む前に、「ディートリヒ叙事詩」(Dietrichepik)の作品群で冒頭部分がいかなる構成であるかをまず確認したい。これを小稿の課題とするのは、『ディートリヒの敗走』の構成を同じジャンルに属する他作品のそれと対比することで、特色の一端、とりわけ語り手の姿勢を明らかにできると考えるからである。

一般にディートリヒ叙事詩諸作品は、ディートリヒ・フォン・ベルンをめぐる口承文芸との関連が強いことから、その文体に依拠したとされている。冒頭部は特にその性質が顕著に見て取れる。例えとして適切ではないかもしれないが、日本の昔話の「昔々あるところに…がいました」のような語り出しで始まるのが基本的なパターンである。しかし各作品における語り手の姿勢はけっして単純でも一様でもない。『ディートリヒの敗走』ではその語り出しに続いて「系譜」が配置されている。それはもはや聞き手に話しかける性質の語りではない。だがその後に展開する主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの活躍とも異質である。従来の研究では「系譜」や物語の主要部分には光が当てられてきたが、それらに先行する冒頭の語り出しは、筆者の目の及んだ限りではほとんど注目されていないのが現状である。

なお本来であれば分析対象を広くとり、様々なジャンルとの比較を行うべきであるが、ここ

ではその作業の基礎となるデータの収集と考察を旨とするので、分析の対象は「英雄叙事詩」の中の「ディートリヒ叙事詩」に限定する。

2. ディートリヒ叙事詩の語り出し

東ゴート国の王テオドリクス（Theodoricus：453? -526）を祖型とするディートリヒ・フォン・ベルン（Dietrich von Bern）が主人公のディートリヒ叙事詩は、ディートリヒの北イタリア支配をめぐる戦いを題材とする「ディートリヒの歴史叙事詩」（historische Dietrichepik：以下とくに断らない限り「歴史叙事詩」）と、侏儒・巨人・怪物・異教徒と主人公（たち）の戦いを描く「ディートリヒの冒険叙事詩」（aventurehafte Dietrichepik：同「冒険叙事詩」）に分類される³。以下の考察は原則として、各作品を論じる場合に現在もっともよく用いられる校訂版に依拠し、必要に応じて他の版も参照することとする。

2.1. 「ディートリヒの冒険叙事詩」の語り出し

冒険叙事詩では、「昔あるところに…」や「かつて…」、「当時…」のような口承文芸に由来する定型表現（ないしはそのヴァリエーション）や語り手の聴衆（受容者）に対する語りかけで始まる傾向が強い。

ともに侏儒との戦いを描く『ゴルデマール』（Goldemar：1235年以前）と『ラオリーン』（Laurin：1300年頃までに成立）は、主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの紹介で始まる。

【冒険叙事詩 例1 『ゴルデマール』】

Wir hân von helden vil vernomen,	私たちは、ディートリヒ殿の時代に
die ze grôzen striten sint bekomen	大いなる戦いに向かった勇士たちについて
bi hern Dietriches ziten.	多くの話を聞いてきました。 (Str. 1, 1-3) ⁴

『ゴルデマール』はディートリヒ叙事詩の中で、『エッケの歌』とともにもっとも早く成立した作品である。ディートリヒ叙事詩に限らず、英雄叙事詩では通常作者は名乗らない。共同体の記憶（口頭伝承）の中で生きつづけてきた英雄であるから、たとえ新規の語りではあっても作者の創作ではない、という意識が働くのだろう。ところが『ゴルデマール』では作者アルブレヒト・フォン・ケメナーテン（Albrecht von Kemenaten）が自ら名乗っている（Str. 2, 2）。物語文芸の匿名性が議論される時、しばしばこのアルブレヒトが引用される。そして例外的現象として説明される。たしかに例外である。それではなぜアルブレヒトは名乗ったのだろうか。ヘルムート・デ・ボアは、この人物が「ベルンの調べ」（Bernerton：『ゴルデマール』・『エッケの歌』・『ズィゲノート』・『ヴィルギナール』に共通する韻律）を創作した詩人であれば、名乗

ることは可能だったと考えた⁵。

デ・ボアの説を証明することは困難だが、説得力はある。その論を前提にすると、アルブレヒトはディートリヒに関する口頭伝承に一定の距離を置いていたことも考えられる。この人物がディートリヒ・フォン・ベルンを英雄とみなす共同体にどっぷりと漬かっていたなら、名乗ることはできなかったかもしれない。宮廷社会でどのような立ち位置にいたかは判断も想像もできないが、この詩人が宮廷文芸のさまざまな作品に通暁していたことはまちがいあるまい。名乗ることができた、あるいはあえてそうしたのは、彼には今日にいう自信とプライドがあったからではないだろうか。『ゴルデマール』が作品として当時の人々からどのような評価を受けたかはわからない。今日に残るのは1355-57年頃に書かれた断片写本1点のみである。しかし詩人としての名声は高かったらしく、すでに13世紀にルードルフ・フォン・エムス (Rudolf von Ems) が賞賛している。そこで筆者は、長い叙事詩を著わすような人物は、事前に抒情詩など短い作品で実績を積み、これを示すことで初めて時間も費用もかかる作品を制作する依頼を得ることができたという仮説を立てたことがある⁶。ここで再度これを提起したい。

【冒険叙事詩 例2 『ラオリーン』】

Czu Berne waz geseßen / eyn degen so vormeßen, / der waz geheysen Dytherich.

ベルンにひとりの豪胆な勇士がいました。それはディートリヒという名でした。

(V. 1-3)⁷

主人公がただちに紹介されている点で、『ラオリーン』(ここでは写本 L₃、14世紀半ばから後半)冒頭の語りはもっともわかりやすい。作品を代表する写本だけで中世文学の世界を把握し尽くすことはけっしてできないし、またそのようなことをしてはいけないが、『ゴルデマール』との差は歴然としている。仮に「語り口」に意味があったとするなら、『ラオリーン』は人々の耳になじみやすいのに対し、作者の名前がいきなり挙げられる『ゴルデマール』は、口頭伝承に親しんだ聞き手に違和感を覚えさせたかもしれない⁸。

しかし同じ作品でも1560年に印刷された H₁₀ 版では、出だしの語りが大きく変わっている。

JHr lieben Herren hie besunder, / woelt jr vernemen grosse wunder, / die vor zeiten geschehen sindt, / wie man es noch geschrieven findt? / Gar sehr weyt in den Landen, / von sehr guten Weyganden, / sind viel harter streit geschehen, / gleich wie es denn die alten jehen. / Wer denn nun mit gutem willen / den andern fein moeg gestillen, / derselb thu solchs on allen haß. / Weiter so merckt mein red hie baß. / Nun läst euch dessen nicht verdriessen. / Ja, moecht ich das von euch geniessen, / jch saget euch viel newer maer / von manchem stolzen Degen Herr. (V. 1-16)⁹

さあこちらにおいでのみなさま、昔起きた驚くべきことをお聞きになりませんか。これらは今なお書き留められております。はるか遠くの国々では、立派な勇士たちにより、数々の激しい戦いが行われました。お年寄りが語っていますように。これからお近くの人を快くお静めいただけます方は、どうかすすんでそうなさってください。それにつづけて私のお話もよくお聞きくだされ。どうかお楽しみください。いやそれどころか、みなさまから喜びをいただけるのであれば、私はみなさまに、誇り高くすぐれた勇士たちの数々について、さらに多くのお耳に新しい話をお伝えしましょう。

同じ作品でも写本や印刷本ごとに本文の異動があることは中世の文芸作品に共通する現象であるが、ディートリヒ叙事詩の諸作品ではとくにその傾向が強い。中でも『ラオリーン』は写本ごと、そして印刷本ごとのヴァリエーションが大きな作品である。写本 L₃ でも語り手が聴衆に話しかける演出が施されているが、この印刷本の語り出しは、朗読のあり方をはるかに強く意識した形態である。

『怪物』(Wunderer、成立年代が不明で最古の写本は15世紀)も作中人物で最も位の高いエッツェル王で語り始める。この作品で主人公ディートリヒが戦う相手は題名通り怪物である。

【冒険叙事詩 例3 『怪物』】

Es sass in Ungerlande ein konick so wol bekant,
der was Etzel genande. (Str. 1, 1-2a)¹⁰
ハンガリーの国に名の知れ渡ったひとりの王が君臨していました。
王はエッツェルという名でした。

ディートリヒが巨人と戦う『ズィゲノート』(Sigenot: 1300年頃までに成立)は、語り手が「昔は驚くべきことが多かった」と前置きを述べてから主人公を紹介する。

【冒険叙事詩 例4 『ズィゲノート』】

Vor zaiten vil der wunder was:	昔は驚くべきことが数々ありました。
in Lamparten ein furste sas,	ロンバルディアにひとりの君主がおりました、
der lept in hohen eren,	その方は誉れ高くお暮しになり
der was gehayssen Ditterich	ディートリヒという名でした
— zu der zait lept nitt sein gleiche —,	(当時この方に匹敵する者はなく)
sasz in einr stat, hiesz Peren.	ベルンという城市に君臨していました。
	(Str. 1, 1-6) ¹¹

『ヴィルギナール』(Virginal: 13世紀前半の成立か)では珍しいことに、主人公と侏儒(ここでは『ゴルデマル』や『ラオリーン』と異なり初めからポジティブな存在)の女王ヴィルギナールとのミンネ(愛)の成就如何がテーマとなっているが、その冒頭も異教徒(中世のヨーロッパ文芸では多くが敵役)の紹介で始まる。

【冒険叙事詩 例5 『ヴィルギナール』】

Daz ich iu sage, daz ist wâr. 私がみなさまにお話しすることは真実です。
ez wuohs ein heiden zwelef jâr ひとりの異教徒が12歳になり、
ze schaden manegem manne. 多くの男に災いをもたらしました。

(Str. 1, 1-3)¹²

この作品には引用した V10 写本を含めて3種の完本があるが、いずれも異教徒の紹介で始まっている。ただ写本 V10 では、この異教徒の名がすぐには出ない。下って82詩節で初めてオルキーゼ(Orkise)と告げられる点は奇妙に思われるが¹³、ともかくも重要な人物の紹介であることはまちがいない。作品を敵役の異教徒の紹介で始めるという語り口も、王女クリームヒルトの紹介で始まる『ニーベルンゲンの歌』の場合と同じように、受容者に斬新な印象を与えた可能性がある。

一方人物ではなく、舞台となる地名を冒頭に挙げる場合もある。先に見た『ラオリーン』のベルンと『怪物』のハンガリーはそれぞれ人名とともに出たが、『ヴォルムスの薔薇園』(Rosen-garten: 13世紀前半か)のヴォルムスと『エッケの歌』(Eckenlied: 1230年以前¹⁴)のグリピアルは、地名それ自体に焦点が当てられている。

【冒険叙事詩 例6 『ヴォルムスの薔薇園』】

Es lyt sich ann dem Rin ein stat so wonnesam,
die ist geheyeßen Wormß und weyß noch manig man. (Str. 1, 1-2)¹⁵
ライン河畔にひとつの素晴らしい城市があります。
これはヴォルムスといい、今なお知る人はたくさんいます。

【冒険叙事詩 例7 『エッケの歌』】

Ain lant das hies sich Gripiar 昔ある国がグリピアルと呼ばれていました
— das ich ú sag, das ist war — (私がみなさまにお話しすることは真実です)
bi haidenschen ziten. それは異教徒の時代でした。 (Str. 1, 1-3)¹⁶

このパターンは、ドイツ語による英雄叙事詩として初めて成立し、ディートリヒ叙事詩をは

じめとする他の作品群の先駆けとなった『ニーベルンゲンの歌』の写本Bでも共通している。その第1詩節が以下の語り出しで始まる。

【関連 『ニーベルンゲンの歌』 写本B】

Ez wuohs in Burgonden ein vil edel magedin, (...). (Str. 1, 1)¹⁷

ブルグントの国にひとりのたいそう高貴な乙女が育っていました (…)

乙女とはむろんクリームヒルトのことだが、地名を先に示すのは作者の嗜好の表われかもしれない。同じ写本の18節と324節にも同様の語り出しがある。

Dô wuohs in Nederlanden eins vil edelen küneges kint (...). (Str. 18, 1)

ニーダーラントの国でひとりのたいそう高貴な王の子が育っていました (…)

Ez waz ein küneginne gesezzen über sê. (Str. 324, 1)

海の彼方にひとりの女王が君臨していました。

この「かつて…がいた」という形式は、すでに繰り返し述べたように新しい物語を始める際の定型表現であるが、あとの2例では先行する話題から転換する語りが始められる。話題だけでなく、そもそも異なる素材を引き寄せたために用いられた可能性もある¹⁸。

「古典」の文芸作品では、しばしば冒頭に作者が詩作の動機などを述べる長大なプロローグが置かれているが、それらと比べると、ここに挙げてきた諸作品の語り出しはきわめて単純である。むろんこれらの作品として文字で書かれたのであり、さもなければ写本に書き継がれないのであるが、ともかくも冒頭部分は口承文芸のスタイルを模したといえる¹⁹。

2.2. 「ディートリヒの歴史叙事詩」の語り出し

では歴史叙事詩の語り手はどのようにその叙述を始めているだろうか。『アルプハルトの死』と『ディートリヒとヴェネツラーン』は冒頭部が欠損しているため確認できないが²⁰、『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』(ともに1275-1300年の成立)は聞き手への語りかけで始まる。小稿の眼目である『ディートリヒの敗走』は以下のように語りが始まる。

【歴史叙事詩 例1 『ディートリヒの敗走』】

Welt ir nu hoaren wuonnder, / so verkünde ich euch besonder / die starchen newen
maere. / Last euch nicht wesen schwaere, / ob ich euch sage die warhait / (das habt
nicht verlait) / von ainem edlen kuanige heer: (V. 1-7)²¹

さあみなさま、驚くべき話をお聞きになりたければ、私がみなさまのためとくに、このた

いへんな、そしてお耳に新しい話をお聞かせしましょう。ひとりの高貴な王様の話が真実かどうか、ご心配には及びません。(どうかお気楽に。)

先に挙げた『ラオリーネ』(写本 L3)・『怪物』・『ヴォルムスの薔薇園』や『ニーベルンゲンの歌』(写本 B)のようにただちに本題が始まる例と比べると、語り手自身の個性が明らかに強く前面に出ている。『ゴルデマール』は別として、コメントが一文ある『ズィゲノート』・『ヴィルギナール』・『エッケの歌』などと比べてもその印象は変わらない。はたしてこの直後から主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの累代の祖先にまつわる語りが始められ、まず始祖ディートヴァルトが紹介される。しかし注意しなければならない。この語り出しで始まるのは、『ディートリヒの敗走』の完本4写本(R, W, P, A)のうち成立が遅い方の2写本のみだからである。断片写本を除くそれら4写本の成立年代は以下の通りである²²。

写本 R (13世紀末)

137葉前面に、オットー・フォン・ハーケンベルク (Otto von Hakenberg、1276年から95年にかけて記録文書に名が出る) およびアルベロ・フォン・クエンリング (Albero von Kuenring、1284年以前生-1342年没) という名の書入れがある。

写本 W (1300-30年頃の成立)

ドイツ騎士修道会のウィーン管区で成立した可能性がある。1358年にはニーダーエスタライヒの有力ミニステリアーレであるトゥルス (Turs) 家が所有していた。

写本 P (1443年から1449年の間に成立)

1449年の時点でアウクスブルクの都市貴族ズィギスムント・ゴッセムブロート (Sigismund Gossembrot、1417年生-1493年没) が所有しており、この人物が制作を依頼した可能性がある。

写本 A (1504年-1516年)

「アンブラス英雄本」(Ambraser Heldenbuch) としてよく知られる豪華写本。皇帝マクシミリアン一世の依頼によりハンス・リートが書写して成立した。

最新の校訂版で再現された語り出し (およびそれに続く主人公の祖先の系譜) は、写本 A に基づく。作品の成立が1275-1300年頃なのであれば、写本 R はその直後に書かれたものということになる。だが時間的に原態にもっとも近いはずであるにもかかわらず、この写本 (および写本 W) の「系譜」はヴォルフディートリヒで始まり、それ以前のディートヴァルト・ズイクヘア・オットニートの記述がない。しかも全体でもわずか200行ほどで、写本 A のほぼ十分の一で

ある²³。この違いを考えるため、写本Rの冒頭を見よう。

Welt ir dar zu stille dagen, / so wil ich iu churzlich sagen: / Do der Wolf her Dietrich /
gelebt het vil wunnechlich / driu jar unt vunf hundert jar / (daz ich iu sage, daz ist
war), / do starp der ellenthafte man. / Nu høeret, als ichz vernomen han: (V. 1-8)²⁴
さてみなさまお静かに願います、さすればすぐみなさまに申します。ヴォルフディートリ
ヒ殿は503年を立派に生きて（私がみなさまにお話しすることは真実です）、この勇敢な士
は亡くなったのです。さあみなさま、私が伝え聞いたお話をお聞きください。

聴衆に静粛を求めるというのは、次例の『ラヴェンナの戦い』でも見られるようにパターン
化した語り口のひとつである²⁵。加えて自分の語りは聴衆に真実を伝えると誓うのも、『ヴィル
ギナール』や『エッケの歌』で見たように、典型的な定型表現である。しかしここに見る写本
R（およびW）の語り出しは、ヴォルフディートリヒの名をすぐに挙げるなど、単純化されて
いる。

実は、『ディートリヒの敗走』で描かれる主人公の「系譜」（2521行まで）は新しい方の写本
PとAが原初形態に近く、古い方の写本RとWは血統の一貫性を重視してヴォルフディートリ
ヒで始めた短縮形である、という見解がすでに以前から定説と認められている²⁶。筆者はむろん
反論するわけではないが、作品の冒頭で聴衆に語りかける部分は、王統の系譜のように文字に
よる構想執筆が必要な部分とは異なり、口承的性格が強い分、変化の可能性も高いと想像して
いる。最初に校訂版から引用した、すなわち16世紀初頭に書かれた写本Aの冒頭の7行が13世
紀末の形態を残すかどうかはわからない、ということを前提とすべきであろう。

各写本（R, W, P, A）のいずれにおいても『ディートリヒの敗走』の直後に置かれ、筋
の展開でも連続する『ラヴェンナの戦い』は、語り手自身の態度表明という観点では表現がや
や弱まる。

【歴史叙事詩 例2 『ラヴェンナの戦い』】

Welt ir in alten mæren	みなさまが古い物語に伝えられた
wnder horen sagen	誉れ高き勇士たちの驚くべき
von rekchen lobewæren,	活躍をお聞きになりたいければ、
so sult ir gerne dar zuo dagen.	さあお静かに願います。
Von grozer herverte,	出陣した大軍について、
wie der von Bern sit siniu lant erwerte	ベルンの殿が後にその国々を守った
	ことを（…）（Str. 1） ²⁷

しかしこの語り出しは、『ニーベルンゲンの歌』の写本Cとの共通性が高い。そしてこの写本は作品全体のテーマを俯瞰する有名な一節で始まる。

【関連 『ニーベルンゲンの歌』 写本C】

Uns ist in alten maeren wonders vil geseit:
von heleden lobebaeren, von grozer arebeit,
von freude und hochgeciten, von weinen unde klagen,
von küener recken striten muget ir nu wunder hoeren sagen. (Str. 1, 1-4)²⁸

私たちには古い物語で驚くべきことが数多く伝えられています — 誉れある勇士たちについて、大いなる戦いの苦難について、喜ばしいことや宴の数々について、涙が流れたことや嘆き悲しんだことについて、猛き勇士たちの戦いについて — これからみなさまに驚くべき話をお聞かせしましょう。

ミヒャエル・クルシュマンはこの節を、技巧を凝らしたもので文末だけでなく文中でも韻を踏み、なおかつ「誉れある勇士たちについて (…)

猛き勇士たちの戦いについて」の部分はその前後の二つの文に共有されると分析する²⁹。異なる見解もあるが³⁰、筆者には判断できない。ただいずれを是とするにせよ、この詩節が後代に少なからぬ影響を与えたことはまちがいない。他作品でもよく似たテキストが確認できるからである。ほかならぬ『ラヴェンナの戦い』の先に引用した第1節がその好例である。共通の表現を挙げれば in alten maeren「古い物語で」、wunder「驚くべきこと (話)」、 hoeren sagen「語るのを聞く」、rekchen lobewære「誉れ高き勇士たち」がある。中でも wunder は中世ドイツの文芸作品全般で頻繁に用いられる語であるが、『ディートリヒの敗走』でも、「驚くべき話」 wuonnder (標準的な語形は wunder) が使用されている。『ニーベルンゲンの歌』の第1詩節はこれを2度も用いている。それゆえ wunder は作品の方向性を規定するキーワードとみなすことが十分可能である。『ディートリヒの敗走』も語り手がこの wunder を用いることで、『ニーベルンゲンの歌』の特徴を (正確には『ニーベルンゲンの歌』と共通する特徴を) 引き継いだのである。ちなみに『ディートリヒの敗走』で用いられた die (...) neuen mære「お耳に新しい話」という表現は、『ニーベルンゲンの歌』と『ラヴェンナの戦い』の alte maere「古い物語」と対照をなしている³¹。

『アンテロイ』(15世紀の「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に掲載)の冒頭の詩節も、『ニーベルンゲンの歌』写本Cの第1詩節との類似性が高い。ビョルン＝ミヒャエル・ハルムスはテキストを以下のように再現する。

【関連 『アンテロイ』】

Es was bey heldes zeitten der wunder mer dan iz

von mangem ftolzen recken wer nun well hören diz
und wi grofs mort geschahe in stürmen und in schlagen
von zagen helldes streitten hört man nit gerne sagen (Str. 1)³²
かつて英雄の時代にあつては、数多くの誇り高き勇士について、
驚くべきことが今日よりもたくさんありました。この話や、
戦闘や打ち合いで大殺戮が起きたことをお聞きになりたい方は（さあお耳を拝借！）
臆病な勇士の戦いの話など聞きたくはないものです。

まず詩節形式が「ニーベルンゲン詩節」(Nibelungenstrophe)に近く幾分単純な「ヒルデブランドの調べ」(Hildebrands Ton)である。さらに先にも挙げた wunder「驚くべきこと」、recken「勇士たち」、hören sagen「語るのを聞く」が用いられている。『ニーベルンゲンの歌』の有名な冒頭の詩節が、当時の人々にいかに大きな印象を与えていたかがうかがえる例である。

『ニーベルンゲンの歌』は口承文芸を単に文字で定着させたものではない。詩人(ないし作中の語り手)は、個々の事象の典拠を挙げる時、けっして「読む」(lesen)という動詞を用いない。常に語りを「聞」(hoeren)いたと表現する。これは口承文芸の文体を構成手段として用いたことに由来する。ブルグント伝説やジーフリト伝説、ブリュンヒルト伝説、さらにディートリヒ伝説などさまざまな口承文芸を紡ぎ合せて一大叙事詩に仕立て上げた作者には、古典文芸の知識もあったことがすでに証明されている³³。古典文芸の知識を持つことと識字力をもつことがけっして等価でないことは、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ(Wolfram von Eschenbach)の「教養」に関する議論でもしばしば強調されている³⁴。こうした事情を考え合わせると、この匿名詩人も識字力を持たなかったと考えることはひとまず可能である。しかし彼が創作しようとした時、ハインリヒ・フォン・フェルデケ(Heinrich von Veldeke)やハルトマン・フォン・アウエ(Hartmann von Aue)、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(Gottfried von Straßburg)、そしてヴォルフラムらとは前提が大きく違っていた。この人物は、フランス語圏の作品を原典として用いることができなかったのである。所与の雛型に依拠したのではない、すなわち2000詩節以上の長きにわたる緊密な構造を一から自分の力で考えた『ニーベルンゲンの歌』の作者には相当程度の学識があり、それらを基にしてこの大叙事詩を構想執筆したと考えるのが自然であろう。それだけに、この作品が同時代や後代の作品に与える衝撃力も大きかったのではないだろうか。

ここで歴史叙事詩にもどろう。『ラヴェンナの戦い』に限らず『ディートリヒの敗走』も、内容的にはディートリヒらがエッツェルの許に亡命する前の段階を描いており、これらの作品は『ニーベルンゲンの歌』の前史をなしている。ブルグントの王族グンターとゲールノートが主人公と敵対する側に置かれるなど、与えられた役割は必ずしも一致しないが、歴史叙事詩の登場人物にはエッツェルやヒルデブランドをはじめとして『ニーベルンゲンの歌』と共通する者

が多い。また詩節形式（『アルプハルトの死』は「ヒルデブランツの調べ」と「ニーベルンゲン詩節」の混合態）や語彙の使用傾向³⁵など、歴史叙事詩の諸作品にはさまざまな面で『ニーベルンゲンの歌』からの影響やそれとの共通性が認められる。繰り返すが、『ラヴェンナの戦い』第1詩節の構成と語彙は、そのもっとも明らかな例の一つである。

語り手はあくまで語りの伝統を守り、これに依拠した定型表現を用いた。しかし見方を変えると、そこに見られる特徴には作者の個性と呼ぶべき要素が少ないともいわなくてはなるまい。残された4写本のうち、よりによって古い方ではなく新しい方の2写本が「古態」をとどめているのであれば、表現の隅々までそれが当てはまると考えたくなるかもしれない。だが、こと語りの出だしに関しては、けっしてそのような断定はできない。

3. 『ディートリヒの敗走』の「系譜」

ここでひとつの問題提起をしたい。作者がその物語の聞き手として最初に想定したのは、制作の依頼者だったのではないだろうか。

ヨーロッパ中世に成立した文芸作品が委託芸術（Auftragskunst）だったことはすでによく知られている³⁶。文芸作品や絵画などの制作という創造的作業から写本の筆写のようなものまで含めて、委託する人物に相応の権力（すなわち財力など）が必要だったことはまちがいない。制作を担う人々を組織するのは教会関係者だっただろう。その人々の中には、ディートリヒ（テオドリクス）の活躍を歌う口承文芸に批判的な態度を示す者もいたにちがいない。テオドリクスは教皇ヨハネスやボエティウス、シンマクスを死に至らしめたからである。教皇グレゴリウス一世以来の教会文書（とくに史書）が示すように、テオドリクスはオーソドクスな人々から批判され続けてきた。

そのグレゴリウス一世により6世紀末に著された『対話』（Dialogi）には、テオドリクスが火山に落ちるというエピソードが記載されている。帯を解かれ（すなわち裸体）、裸足で両手を（後ろ手に）縛られた王テオドリクスが、教皇ヨハネスとシンマクスにはさまれて引き立てられ、火山ヴルカヌスの火口に投げ入れられた。それはテオドリクスが教皇ヨハネスを監獄に入れて苦しめたあげくに殺し、同じくシンマクスも剣で斬殺したからであり、不当な仕打ちへの当然の罰だと記されている³⁷。以後この記述は、教会関係者の間で公理のようにみなされ書き継がれていった。たとえ口頭伝承ではディートリヒが英雄として語り継がれていても、教会の権威はこれを繰り返し否定してきた。

しかし権力を有する依頼者が、たとえばディートリヒの系譜を入れるよう要求した場合、これに逆らうことは困難だったのではないだろうか。あるいは逆に、作品を制作する人物が依頼

主の嗜好を汲んだ上で系譜を取り入れたこともありうる。どんなに想像しても所詮証明することはできないが、資力を提供する人物の不興を買うような作り方はしなかったと思われる。その有力者の嗜好を作り手が知った上で、『ディートリヒの敗走』の作者が依頼者を喜ばせる形態に仕立て上げることは、なかったと考える方が不自然である。

ではどのような人がいかにして物語文芸を創作したり写本を筆写したりしたのだろうか。ごく一般論として考えても、作り手が個人やごく数人の小グループであることは稀で、通常は一定の規模をもつ組織があったと考えられる。写本の入手・羊皮紙の調達・罫線引き・(執筆する前の)内容の構想・執筆・製本など様々な過程があったからである。これに挿絵が加わると規模ははるかに大きくなっただろう³⁸。したがって、この系譜を作品の冒頭に置いた事実は、単に英雄としてだけではなく、王としてのディートリヒに強い関心をもつ依頼者の意向や嗜好を反映するものと考えたい。

ここで先に挙げた写本の書誌にふたたび目を向けよう。最古の写本Rには、記載順にハルトマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』³⁹、シュトリッカーの『司祭アーミス』⁴⁰、ナイトハルトの抒情詩⁴¹、『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』および抒情詩数点が掲載されている。書いた写字生は1人と確認されている。その137葉(写本の最終葉)前面に先述のotto・フォン・ハーケンベルクとアルベロ・フォン・クエンリングの名がある。ともに13世紀から14世紀にかけての記録文書に名前が残るミニステリアーレであった。ハーケンベルク家の人物が作品の制作を依頼したことも、クエンリング家の人物が写本を所有したこともともに証明はできない⁴²。しかし写本Wも14世紀に有力貴族が所有し、写本Pは15世紀に都市貴族の手にあった。写本Aは16世紀初頭に皇帝の委託によって成立している。こうした事実からリーナートは、戦士貴族層に属し、今日のオーストリアでニーダーエスタライヒに勢力を持っていた人々が作品の最初の受容者だったと想定する⁴³。写本の丹念な研究に基づく実証的な成果といえよう。

これらの人物が存在したことは大きな意味を持つ。時代が下ると富裕層が拡大するため写本と所有者の関係は複雑になるのだが、13、14世紀の段階ですでに2つの写本の所有者がともに戦士貴族だったのであれば、依頼者も同じ階層に属していた可能性は一定程度認められてよい。筆者は、その戦士貴族の階級に属する依頼者の嗜好に沿う形でディートリヒの「系譜」が創作され、作品の中に書き込まれたと仮定する。もちろんことさら述べるまでもないが、そこに叙述されたディートリヒの祖先たちの存在と活躍を、当時の人々がどの程度「真実」として受けとめたかは、想像するしかない。小稿の冒頭では、依頼者がディートリヒを共同体の英雄とみなしたがゆえに「系譜」を書かせたのではないかという疑問を提示した。少なくとも、そうした観念が契機となって長大な系譜が執筆された可能性はあると思われる。教会系のオーソドックスな反テオドリクス意識に対抗して、同一人物である口承文芸の英雄ディートリヒの王統を描き、一種の権威づけを図ったことも考えられる。ただ各写本に掲載された他作品を見ると⁴⁴、そ

れらはあくまで今日にいう娯楽の対象である。ディートリヒの祖先の「系譜」を最初の受容者が本気で自分たちの祖先と信じていたと断定することはできない⁴⁵。

歴史叙事詩の『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』は、冒険叙事詩の『ラオリーン』などと比べると残存写本がはるかに少ない。先に見たように、完本は13世紀から16世紀まで各世紀1点ずつしか残っていない。ほとんど忘れられていた、あるいは多くの人には未知の作品だった可能性もある。だがこの「系譜」はハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(1370-80年頃)には「まともな典拠」⁴⁶として取り入れられた。しかも皇帝マクシミリアン一世の委託で制作された豪華写本「アンブラス英雄本」でふたたび息吹が与えられている。ディートリヒ・フォン・ベルンは、少なくともいくつかの共同体では(物語の)英雄として、強い生命力を維持していたことが読み取れる。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費15K02399の助成を受けたものである。

【注】

- 1 女性が冒頭に置かれるのは画期的とみなされたであろう。Vgl. Jan-Dirk Müller: Das Nibelungenlied. In: Interpretationen. Mittelhochdeutsche Romane und Heldenepen. Hrsg. von Horst Brunner. Stuttgart: Reclam 1993 (RUB 8914). S. 146-172, hier S. 152f.
- 2 Michael Curschmann: Zu Struktur und Thematik des Buchs von Bern. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 98 (1976). S. 357-383, hier S. 358.
- 3 ディートリヒ叙事詩というジャンルをこのように分けることには、研究者の間で共通理解が得られている。たとえば冒険叙事詩の作品を集めた「英雄本」(Heldenbuch)が複数作成されたのに対して、歴史叙事詩と冒険叙事詩の作品が同じ写本に掲載された例は知られていない。しかし冒険叙事詩の『ヴィルギナル』でディートリヒの父親ディートマルが言及されたり、以下に見るように『怪物』にエッツェル(アッティラ)が登場するなど、境界領域的現象は多数確認できる。当時の人々に一定のジャンル意識はあったと推定されるが、今日の研究者のような厳格さを前提とするべきではない。
- 4 Deutsches Heldenbuch. 5. Teil. Dietrichs Abenteuer von Albrecht von Kemenaten nebst den Bruchstücken von Dietrich und Wenezlan. Hrsg. von Julius Zupitza. Berlin: Weidmann 1870. Nachdruck Hildesheim: Weidmann 2004, S. 202-204. なお以下各作品の成立年代は Elisabeth Lienert: Mittelhochdeutsche Heldenepik. Eine Einführung. Berlin: Schmidt 2015 (Grundlagen der Germanistik 58)による。
- 5 Helmut de Boor: Albrecht von Kemnaten. In: Helmut de Boor. Kleine Schriften. Hrsg. von Roswitha Wisniewski/Herbert Kolb. Band 1. Berlin: de Gruyter 1964. S. 198-208, hier S. 205.
- 6 Tatsuo Terada: Albrecht von Kemenaten und seine literarische Identität. In: Doitsu Bungaku 92 (1994), S. 97-105. 同様の説は以下でも見られる: L. Peter Johnson: Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Beginn der Neuzeit. Band II/1. Die höfische Literatur der Blütezeit. Tübingen: Niemeyer 1999, S. 330; Bernd Schirok: Wolfram und seine Werke im Mittelalter. In: Wolfram von Eschenbach. Ein Handbuch. Hrsg. von Joachim Heinzle. Band I. Autor, Werk, Wirkung. Berlin/Boston: de Gruyter 2011. S. 1-81, hier S. 2.
- 7 Laurin. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Sonja Kerth/Esther Vollmer-Eicken. Teilband I: Einleitung, Ältere Vulgatversion, >Walbran<. Berlin/Boston: de Gruyter 2011 (Texte und Studien zur mittelhoch-

- deutschen Heldenepik 6/1).
- 8 ただその『ラオリーン』でも、15世紀後半から16世紀半ばになると、作者として「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」(Heinrich von Ofterdingen) という名が末尾に記された写本や印刷本が現れ、現在合計11点残っている。(この詩人の名はノヴァーリスの小説の題名(日本語訳では『青い花』)にもなり、今日なおよく知られてはいるが、詳しいことは何もわかっていない。)ハインリヒの名は13世紀末すでに言及があり、名前だけは中世を通してよく知られてはいたらしいが、『ラオリーン』の作者とみなす証拠は見つかっていない。中世の文芸作品では作者がヴォルフラム・フォン・エッシェンバハに仮託される例がしばしば見られるのと同じで、ここでは共通祖本でハインリヒが引き合いに出されたのではないだろうか。『ゴルデマール』のアルブレヒトが作品冒頭で名乗ったのとは対照的に末尾でハインリヒの名を引き合いに出したのは、口頭伝承のパターンをある程度守ったからだとも考えられる。
 - 9 Laurin (註 7), Teilband II, S. 257.
 - 10 Der Wunderer. Hrsg. von Florian Kragl. Berlin/Boston: de Gruyter 2015 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 9).
 - 11 Sigenot. In: Das Dresdener Heldenbuch und die Bruchstücke des Berlin-Wolfenbüttler Heldenbuchs. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart: Hirzel 2006, S. 244-295.
 - 12 (写本 V₁₀): Deutsches Heldenbuch. 5. Teil. (註 4), S. 1-200; (写本 V₁₁): Das Dresdener Heldenbuch und die Bruchstücke des Berlin-Wolfenbüttler Heldenbuchs. Edition und Faksimile. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart: Hirzel 2006, S. 360-392.; (写本 V₁₂): Dietrichs erste Ausfahrt. Hrsg. von Franz Stark. Stuttgart: Der litterarische Verein in Stuttgart 1860 (Bibliothek des litterarischen Vereins in Stuttgart 52). ただしミネの描かれ方は写本によって異なる。ディートリヒと女王は、写本 V₁₁ と V₁₂ では結婚に至るが、写本 V₁₀ ではその直前で事態の急変により主人公は女王の許を去る。
 - 13 写本 V₁₁ では第1詩節でテレファス (Terevas)、写本 V₁₂ も同じく第1詩節でテリュファス (Teriufas) という名が挙げられる。仮に V₁₀ の本文が作者のオリジナルに最も近いのであれば、V₁₁ や V₁₂ 系の改作者はこの「わかりずらさ」を改めたといえるのかもしれない。中世の物語文芸でひとたび登場した人物の名前がかなりあとになってから紹介される例としては、クレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(天沢退二郎訳、『フランス中世文学集2』東京:白水社1991年(141-323頁)、209、318頁; Chrétien de Troyes: Perceval. Altfranzösisch/Deutsch. Übersetzt und hrsg. von Felicitas Olef-Krafft. Stuttgart: Reclam 1991 (RUB 8649), S. 587)や『ルーオトリープ』(Ruodlieb. Frühe deutsche Literatur und lateinische Literatur in Deutschland 800-1150. Hrsg. von Walter Haug/Benedikt Konrad Vollmann. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1991 (Bibliothek des Mittelalters 1). S. 388-551 und 1306-1406, hier S. 440, 514, 1352, 1381; 丑田弘忍(訳)『中世ラテン語叙事詩・ヴァルター之歌』東京:朝日出版社1999年(183-331頁)、193頁)などがある。中世には「見知らぬ人に名前を教えてはいけない」という習慣がさまざまな文化圏で存在していたことが知られているが、この現象と関係するのだろうか。今後の課題としたい。
 - 14 『エッケの歌』が1230年頃すでに成立していたと仮定する根拠として、『カルミナ・ブラーナ』(永野藤夫(訳)東京:筑摩書房1990年、275頁; Carmina Burana. Texte und Übersetzungen. Mit den Miniaturen aus der Handschrift und einem Aufsatz von Peter und Dorothea Diemer. Hrsg. von Benedikt Konrad Vollmann. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1987 (Bibliothek des Mittelalters 13), S. 648)で言及されている事実がある。口承の素材が引用されたという疑義はあるが、通説にしたがう。
 - 15 Rosengarten. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Sonja Kerth/Svenja Nierentz. Teilband I: Einleitung, >Rosengarten< A. Berlin/München/Boston: de Gruyter 2015 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 8/1). 写本は R₁₂ による。
 - 16 Das Eckenlied. Sämtliche Fassungen hrsg. von Francis B. Brévar. Tübingen: Niemeyer 1999 (Altdeutsche Textbibliothek 111). Teil 1. 本文は写本 E₂ (13・14世紀)による。なおここでは立ち入ることができないが、『エッケの歌』も上で述べたような写本や印刷本ごとの本文異動が大きい。
 - 17 引用は以下の版による。Das Nibelungenlied und die Klage. Nach der Handschrift 857 der Stiftsbibliothek St. Gallen. Mittelhochdeutscher Text, Übersetzung und Kommentar. Hrsg. von Joachim Heinzle.

- Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 2013 (Bibliothek des Mittelalters 12).
- 18 Achim Masser: Von Alternativstrophen und Vortragsvarianten im Nibelungenlied. In: Hohenemser Studien zum Nibelungenlied. Hrsg. von Achim Masser. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt 1981 (Monfort 3/4), S. 299-311 を参照。なお「話題転換」の形式は他にもある。たとえば『ヴィルギナル』の72節は「さて私たちは二人（ヒルデブラントと乙女）にこのまま行ってもらい、ベルン殿の次第をお話ししましょう。」(nu lāzen wir si riten hie / und sagen wiez dem Bernære ergie. Virginal (V₁₀) (註12), Str. 72, 4f.) と語る。このパターンも中世の文芸ではしばしば見られる。しかし小稿は冒頭の語りを分析対象とするので、先行する話題を意識した形式は割愛する。
 - 19 口承文芸の重要な特徴である定型表現の「密度」は、ミヒャエル・クルシュマンによると『ラオリーン』(A = L₃) でもっとも高い。写本 L₃ の『ラオリーン』は「歌い」を前提とする詩節形式ではなく、基本的に文字文化の性格が強い脚韻詩行で構成されている。Vgl. Michael Curschmann: Rezension zu: Deutsche Heldenepik in Tirol. Hrsg. von Egon Kühebacher. Bozen: Athesia 1979 (Schriftenreihe des Südtiroler Kulturinstitutes 7). In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 103 (1981), S. 313-318, hier S. 318. 定型表現は作品を構成する手段であることが確認できる。クルシュマンは同時に、現存する諸作品がけっして口承文芸の「聞き書き」ではないことも示している。寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(5)——概念規定に関する諸問題——」『メディア・コミュニケーション研究』57 (2009)、35-54頁も参照されたい。
 - 20 Alpharts Tod, Dietrich und Wenezlan. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Viola Meyer. Tübingen: Niemeyer 2007 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 3).
 - 21 Dietrichs Flucht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Gertrud Beck. Tübingen: Niemeyer 2003 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 1).
 - 22 Renate Achenbach: Handschriften und ihre Texte. Dietrichs Flucht und Rabenschlacht im Spannungsfeld von Überlieferung und Textkritik. Frankfurt am Main: Lang 2004 (Bayreuther Beiträge zur Literaturwissenschaft 26), S. 17-157; Elisabeth Lienert: Die >historische< Dietrichepik. Untersuchungen zu >Dietrichs Flucht<, >Rabenschlacht< und >Alpharts Tod<. Berlin/New York: de Gruyter 2010 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 5), S. 77-85.
 - 23 Lienert: Die >historische< Dietrichepik (註22), S. 90.
 - 24 Dietrichs Flucht (註21), S. 74.
 - 25 ディートリヒ叙事詩諸作品の写本や印刷本では、聴衆に静粛を求める丁寧な表現がしばしば見られる。聴衆の社会的地位が高く、朗読者や語り芸を披露する人々は多くの場合身分がはるかに低かったことを考えると、このような表現があらかじめ本文に入れられたのも納得がいく。寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(4)——享受史の一側面——」『メディア・コミュニケーション研究』54 (2008)、1-17頁も参照していただければ幸いである。
 - 26 Lienert: Mittelhochdeutsche Heldenepik (註4), S. 102.
 - 27 Rabenschlacht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2005 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 2).
 - 28 Das Nibelungenlied. Nach der Handschrift C der Badischen Landesbibliothek Karlsruhe. Mittelhochdeutsch und Neuhochdeutsch. Hrsg. und übersetzt von Ursula Schulze. Düsseldorf/Zürich: Artemis & Winkler 2005 による。写本 A の字句も C とほぼ同じである。なお上記写本 B を校訂したハインツレは、その注釈 (註17, S. 1036) で写本 C のテキストにおける第1詩節を引用しているが、3行目前半を von freuden und hōchgeziten と記載している。そこで典拠とされたのはウルズラ・ヘニヒの校訂版 (Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Hrsg. von Ursula Hennig. Tübingen: Niemeyer 1977 (Altdeutsche Textbibliothek 83)) であるが、その原文では freuden ではなく freude で、シュルツェ版と同じである。ハインツレは単数形 freude と複数形 freuden の違いを詳細に論じておりきわめて有益なのだが、語形を変えた説明は見出せなかった。ハインツレはここのみ写本 ADd (frouden, vreuden, freuden と複数形) に依拠したのだろうか。この語形についてはウィーン大学ドイツ語学文学研究科が運営するサイトを参照：
https://germanistik.univie.ac.at/fileadmin/user_upload/inst_germanistik/Textarchiv/Texte_und_

- Medien/wrkst_synopse.pdf (2015年11月4日確認)。
- 29 Michael Curschmann: Dichter *alter mære*. Zur Prologstrophe des >Nibelungenliedes< im Spannungsfeld von mündlicher Erzähltradition und laikaler Schriftkultur. In: Gerhard Hahn/Hedda Ragotzky (Hrsg.): Grundlagen des Verstehens mittelalterlicher Literatur. Literarische Texte und ihr historischer Erkenntniswert. Stuttgart: Kröner 1992 (Kröners Studienbibliothek 663). S. 55-71, hier S. 64. 「共有構文」(Apokoinu) の概念については荻野蔵平・齋藤治之(編著)『ドイツ語史小事典』東京: 同学社2005年、15頁を参照。
 - 30 Alois Wolf: Heldensage und Epos. Zur Konstitutionierung einer mittelalterlichen volkssprachlichen Gattung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. Tübingen: Narr 1995 (ScriptOralia 68), S. 277f. ヴォルフは2行目で文が一度切れると想定している。
 - 31 この点は古くから論じられている。最近では Lienert: *Mittelhochdeutsche Heldenepik* (註4), S. 108f. なおこれら表現レベルでの共通点は先に見た『ラオリーン』(印刷本¹¹⁰)の「聞く」vernemen (hoeren と同義)、「驚くべきこと」wunder, 「勇士」weygant, degen (recke と同義)、「お耳に新しい話」newer maer でも確認できる。写本や印刷本のレベルに分け入るとディートリヒ叙事詩の他作品でも見られるが、それらの記述と分析は今後の課題としたい。
 - 32 Björn-Michael Harms: Der Artushof dankt ab. Heldenepisches Erzählen im >Antelan<. Mit einer Edition und einer Übersetzung. In: Freiburger Universitätsblätter 183 (2009), S. 75-95. この作品については Tatsuo Terada: Zum Wortschatz in Lienhart Scheubels Heldenbuch. In: Neue Beiträge zur Germanistik 145 (2012) S. 101-114 も参照されたい。
 - 33 Werner Fechter: Lateinische Dichtkunst und deutsches Mittelalter. Forschungen über Ausdrucksmittel, poetische Technik und Stil mittelhochdeutscher Dichtungen. Berlin: Schmidt (Philologische Studien und Quellen 23), S. 107-139.
 - 34 Joachim Bumke: Wolfram von Eschenbach. 8., völlig neu bearbeitete Auflage. Stuttgart: Metzler 2004 (Sammlung Metzler 36), S. 5-9.
 - 35 「戦士」を表す語彙(helt, degen, recke, wigant および ritter)の使用傾向は『ニーベルンゲンの歌』・『ディートリヒの敗走』・『ラヴェンナの戦い』で共通性が高い。Terada Tatsuo: Kriegerbezeichnungen in der Dietrichepik. In: Nenpo. Jahresbericht des Germanitischen Seminars der Hokkaido Universität 32 (2005), S. 57-79 を参照されたい。
 - 36 Joachim Bumke: Die höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im Mittelalter. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1986 (dtv 4442), S. 638f. (ヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』平尾浩三・和泉雅人・相澤隆・斎藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子(訳)東京: 白水社1995年、588-590頁)。当時の貴族層が自分で作品を書くのはほぼありえないことだった。13・14世紀当時の貴族層で識字力を有していたことが確認できるのはごく限られた人々である。その少数の人たちでも、文芸作品の成立に自らの識字力をもって直接関与したとは考えにくい。Vgl. Alfred Wendehorst: Wer konnte im Mittelalter lesen und schreiben? In: Johannes Fried (Hrsg.): Schulen und Studium im sozialen Wandel des hohen und späten Mittelalters. Sigmaringen: Thorbecke 1986 (Vorträge und Forschungen 30), S. 9-33; Karl-Heinz Spieß: Zum Gebrauch von Literatur im spätmittelalterlichen Adel. In: Ingrid Kasten/Werner Paravicini/René Pérennec (Hrsg.): Kultureller Austausch und Literaturgeschichte im Mittelalter. Sigmaringen: Thorbecke 1998 (Beihefte der Francia 43), S. 85-101.
 - 37 Grégoire le Grand: Dialogues. Tome III (Livre IV). Texte critique et notes par Adalbert de Vogüé. Traduction par Paul Antin. Paris: Les éditions du Cerf 1980 (Sources chrétiennes 265), S. 104, 106. なお Ex Gregorii Magni dialogorum libris. IV, 31. In: Monumenta Germaniae Historica. Scriptores rerum Langobardicarum et Italicarum saec. VI-IX. Hrsg. von Georg Waitz. Hannover: Hahn 1878. S. 524-540, hier S. 540 も参照。
 - 38 寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(3)——J. ブムケによる「不確定テキスト」(‘der unfeste Text’)の概念を中心に——」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』54 (2005)、89-107頁も参照されたい。
 - 39 Iwein. In: Hartmann von Aue: Gregorius, Der arme Heinrich, Iwein. Hrsg. und übersetzt von Volker

- Mertens. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 2004 (Bibliothek des Mittelalters 6), S. 317-767. 翻訳としてリンケ珠子（訳）『イーヴェイン』（『ハルトマン作品集』平尾浩三・中島悠爾・相良守峯・リンケ珠子（訳）東京：郁文堂1982年、261-409頁）がある。
- 40 Des Strickers Pfaffe Amis. Hrsg. von K[in'ichi] Kamihara. 2., revidierte Auflage. Göppingen: Kümmerle 1990 (Göppinger Arbeiten zur Germanistik 233); Der Stricker: Der Pfaffe Amis. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Hrsg., übersetzt und kommentiert von Michael Schilling. Stuttgart: Reclam 1994 (RUB 658). 翻訳として藤代幸一（編訳）『司祭アーミス 付・カーレンベルクの司祭』東京：法政大学出版局1987年がある。
- 41 Neidhart-Lieder. Texte und Melodien sämtlicher Handschriften und Drucke. Hrsg. von Ulrich Müller/Ingrid Bennewitz/Franz Viktor Spechtler. 3 Bände. Berlin/New York: de Gruyter 2007. 翻訳として伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・有川貫太郎・松浦順子（訳）『ナイトハルトの叙情詩』（その一）（その二）（その三）（『言語文化論集』V-2(1984年)、175-226頁；同 VI-2(1985年)、367-427頁；同 VII-2(1986年)、161-229頁）がある。
- 42 Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik (註 22), S. 78. 当時は写本の貸借がしばしば行われていたので、彼らが一時的な借主ないしその時点での所有者だった可能性はある。
- 43 Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik (註 22), S. 9.
- 44 上記の写本 R だけでなく W、P、A のすべてが複数の作品を掲載する集合写本である。その詳細については Achenbach (註 22), S. S. 19f., 53f., 77-79, 123-128; Lienert: Die ›historische‹ Dietrichepik (註 22), S. 77f., 80, 82, 83 を参照。
- 45 『ディートリヒの敗走』2439-41行に「(アメルンクは) (その長男の) 勇士ディートヘアにプライザハとベルンの国を与えた」(Do gab er [Amelung] Brisache / und Bern daz lant / Diether dem wigant.) という記述がある。今日のフライブルク（ブライスガウ）やその近郊のプライザハでは、このディートヘアの息子たちハルルンゲ (Harlunge) が共同体の先達であるという伝承がかつてあったことが知られている。受容者がいつから（いつまで）何をどこまで信じていたかについてはなお考察の余地がある。
- 46 Joachim Heinzle: Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik. Berlin/New York: de Gruyter 1999, S. 62: "seriöse historische Quelle".

(2015年11月 4 日受付、2016年 2 月25日受理)

《Zusammenfassung》

Narrative Eingänge der Dietrichepen im Hinblick auf die ‘Genealogie’ des Berners in ›Dietrichs Flucht‹

Tatsuo TERADA

Die Texte der mittelhochdeutschen Dietrichepen sind bekanntlich divers und variationsreich überliefert. Schon der epische Eingang zeigt sich bei jedem Epos unterschiedlich, vor allem wenn man die Ausformungen in Handschriften und Drucken ab dem 15. Jahrhundert berücksichtigt.

›Dietrichs Flucht‹ und ›Rabenschlacht‹, Kernstücke der historischen Dietrichepik aus dem 4. Viertel des 13. Jahrhunderts, sind, abgesehen von den zwei Bruchstücken, in vier Handschriften erhalten: R (Ende 13. Jh.), W (1. Viertel 14. Jh./Anfang 2. Viertel 14. Jh.), P (1443–49) und A (1504–16). Die beiden älteren Handschriften geben dabei eine gekürzte Form der sogenannten Genealogie von Dietrichs Vorfahren bei ›Dietrichs Flucht‹ wieder, indem sie den ca. 2500 Verse starken Teil auf etwa 200 Verse reduzieren. Es ist anzunehmen, dass die Hss. P und A die ursprüngliche Form besser bewahren. Das Exzerpt dieser Vorgeschichte, das — wenn auch in stark geraffter Form — bei der ›Weltchronik‹ Heinrichs von München (um 1370/80) Platz fand und der Genealogie bei ›Dietrichs Flucht‹ inhaltlich entspricht, legt dies auch nahe. Diese Genealogie macht somit einen vollständigen und originalgetreuen Eindruck, aber erst 150 bis 200 Jahre nach der Entstehung des ‘Originals’ kamen die beiden jüngeren Handschriften der Fluchtepen zustande.

Der oder die Redaktoren der (gemeinsamen) Vorlage(n) von Hss. P und A haben möglicherweise erheblich in den Text eingegriffen, wie die RW-Bearbeiter mit der Geschichte der Ahnen des Berners umgegangen sind. Man kann davon ausgehen, dass es sich bei den ersten Versen (*Welt ir nu hoeren wuonnder ...*) bei P und A auch um eine verarbeitete Form der Vorlage(n) handelt.